

## 古墳時代後期の地域編成：京都平野・宗像地域における古墳の分布様相から

岡田，裕之  
九州大学 21世紀COE研究員：日本考古学

<https://doi.org/10.15017/3696>

---

出版情報：史淵. 141, pp.117-136, 2004-03-10. 九州大学大学院人文科学研究院  
バージョン：  
権利関係：

# 古墳時代後期の地域編成

——京都平野・宗像地域における古墳の分布様相から——

岡 田 裕 之

## はじめに

古墳時代後期、とくに六世紀後半代には群集墳・横穴墓が爆発的に増加する。この現象は、従来の古墳築造原理とは異なっており、群集墳・横穴墓を造営する契機や被葬者層について、先学による多くの研究がなされ、明らかになってきた。一方、従来の前方後円墳などの大型古墳もこの時期に築造されることから、群集墳の築造という大きな変化の中で、これら大型古墳の築造原理がどのように変化するのかという点にも問題がある。これら大型古墳・群集墳などの後期古墳が当時の地域単位のなかでどのように形成されるのかという問題は、国造制のような当時の支配形態や後の律令期の地域編成を考える上で重要と思われる。また、大型古墳と群集墳・横穴墓の階層的関係がどのような形で現れるのかという点も明らかにする必要がある。

筆者はかつて、北部九州における須恵器生産の動向について、六世紀から八世紀代にかけて通時的にみたことがあるが、旧国の筑前と豊前地域において、その生産体制がそれぞれ異なる可能性を指摘した<sup>(1)</sup>。この問題はそれらの地域における大型古墳・群集墳の動態を検討することによって、解決の糸口がみえてくると思われる。対象

とする京都平野および宗像地域は、古墳時代をとおして大型古墳が盛んに築かれた地域であり、さらに群集墳のなかにも横穴式石室を埋葬主体にもつ古墳により群形成がなされる一方で、横穴墓を墓制とする群形成がなされるなど、墓制のヴァリエーションが顕著にみられる。このことから、両地域における大型古墳・群集墳の分布様相、およびそれらの消長を明らかにすることによって、当該期の地域編成のあり方の一端に近づけると思われる。

## 一、研究史

古墳時代後期において、大型古墳および古墳群、群集墳は政治的関係を反映していると考えられ、これまでも多くの研究がなされてきた。

群集墳論においては、その成立を古い共同体の分解と家父長的階級関係の発展の結果と捉え、造墓主体に「家父長的家族」と考える立場がある一方で、首長以外のものの「カバネ秩序」への編入、すなわち首長以外のものが「擬制的秩序」に組み込まれることによる支配の強化を示すとする、大きく二つの立場があった。白石太一郎氏は、これらの立場に基本的には依拠しながらも、群集墳の成立が大和政権を構成する有力氏族による大規模な「擬制的同族集団」の形成と発展によると考えた。<sup>(4)</sup>その後、群集墳の出現について、大和政権が複数の造営主体へ「墓域の賜与」をおこなうことによる同族関係を示すとする見解等<sup>(5)</sup>もみられたが、基本的には従前のものを踏襲していた

これら従来の議論に対して、田中良之氏は群集墳の造営を家父長層の台頭の結果ではなく、「父系かつ直系的に継承される家長のもとに構成された直系・傍系の家族集団のうち、傍系親族の独立を伴う分節運動」であったとし、<sup>(6)</sup>群集墳の造営・造墓主体に関する議論に新しい展望を提示した。<sup>(7)</sup>

群集墳の被葬者像が次第に明らかになる一方で、地域を構成する大型古墳や古墳群と群集墳との関係、群集墳

の群構成における階層性が問題とされてきた。

都出比呂志氏は、近畿における後期古墳群の「群」の内容を墳丘形態・規模から次の三つに分類した。<sup>(8)</sup> すなわち、(一) 前方後円墳・大型円墳・方墳のみで構成され、前期古墳以来の系譜をもつ、支配者集団の古墳群と考えられるもの、(二) 前方後円墳・大型円墳・方墳とともに小型円墳群が伴い、被葬者間に階層差がみられるもの、(三) 小型円墳のみで構成され、被葬者の大きな格差のみられないものに分け、さらに(三)は①数基の小墳群が一単位となつて独立的に存在するもの、②等質的な小墳の大群集が形成されるものに分けた。そして、これらのうち、(二)・(三)を「群集墳」と呼んだ。

また、水野正好氏は群集墳の構成に着目し、古墳の一小群を一家族単位の墓域と想定したうえで、(一)家族の墓域、(二)氏族の墓域、(三)同族(氏族)の墓域、(四)村々の墓域と分け、それらの階層性を指摘した。<sup>(9)</sup>

辰巳和弘氏は、濃密な分布を示し、墓域が限定されている群集墳を「密集型群集墳」と呼ぶのに対して、五世紀後半から六世紀前葉頃に成立し、限定された墓域も設けず、造墓期間が一世紀前後と長い群集墳を、それを構成する小支群の分布状況から「散在型群集墳」と呼んだ。そして、六世紀後半から七世紀前葉にはこの両者が並行して造墓活動を行っており、前者を上位、後者を下位の社会的地位にあつた集団と考えた。<sup>(10)</sup>

群集墳構成の時間的変化を指摘した和田晴吾氏は、古式・新式・終末式に分類をおこない、古式群集墳は古墳時代後期前半を中心とし、木棺直葬のほか多様な埋葬施設をもつ円墳、小型低方墳の円墳化したもの、新式は古墳時代後期中葉から飛鳥時代初頭を中心とする畿内型横穴式石室をもつ円墳、終末式は飛鳥時代的小型化した畿内型横穴式石室や小石槨、木棺直葬をもつ方墳を主体とするものとした。<sup>(11)</sup> そして、大和政権による有力家長層の把握の仕方の差が、これらの基本的差異に現れたとした。とくに、新式群集墳の盛行は、首長墳としての前方後円墳の消滅、円墳化と対応し、首長墳が弱体化し、政権の支配機構のなかにより官僚的性格の強いものとして取

り込まれていった結果とする。また、六世紀後半に顕著な首長墳がみられない地域が増えるのは、首長層が政權中枢につながる上級層と在地の下級層に分解し、後者の場合、墓域を共有する有力家長層と明確な識別を欠くようになるためと推測した。

このように、大型古墳・古墳群や群集墳の群構成による差が指摘されるとともに、それら被葬者間の関係やその背景についても問題とされてきた。

白石太一郎氏は、畿内の大型古墳と大型群集墳との関係について、いくつかの事例をその分布状況から類別し、大型古墳の被葬者に擬定されていた人物と群集墳を形成した集団との間に想定される関係がそれぞれに異なるとした。その上で、いずれの場合でも群集墳形成の核をなした大型古墳の被葬者は、群集墳を形成した集団の擬制的な同族的結合の中心となるような人物であり、記紀や『新撰姓氏録』に記載のある同祖・同族系譜との関係を指摘した。<sup>(12)</sup>

また、一定地域内の古墳・群集墳の分布状況から政治編成を明らかにする試みとして、河村好光氏は羽咋地域における後期古墳の編成秩序を検討し、各古墳群は共通の祖先より派生したものと認識される、觀念上の一系列の祖先系譜を主張するとした。<sup>(13)</sup> また、古墳群間に重層的構造が成立するのは、上祖に対してもっとも直系を首長とし権威ある系譜を主張する群と、傍系的に連なる集団の違いと考えた。そして、後期古墳は、同族関係と族制的軍事編成に秩序づけられ、血縁的原理を基礎とする統治の要をなすとした。

さらに、広域のかつ通時的な観点から、和田晴吾氏は中期古墳の秩序について、大王・首長層が中小首長層を序列化し、地域単位で編成する秩序であったとして「首長連合体制」と呼び、そのもとで「地域首長連合」と、それを包括する「畿内首長連合」が重層的な結合をみせたとする。<sup>(14)</sup> しかし、後期になると、この秩序は次第に崩壊し、首長層は官人化するとともに、民衆の変遷を目的とした方向性を辿るとした。

以上のように、大型古墳・古墳群と群集墳との関係について多くの研究がなされてきた。群集墳の出現が大型古墳の動きと、いかなる関係をもつのかという点は、群集墳形成の基層となる地域単位、さらに上位の大型古墳間の関係にあらわれる地域単位というように、地域単位の重層的な関係によつて検討する必要がある。本稿では、京都平野周辺と宗像地域の二地域を取り上げ、これらの地域における大型古墳・群集墳の分布様相とその動態をみてみることにする。

## 二、大型古墳・群集墳の分布様相

### (一) 京都平野周辺

まず、五世紀以降の大型古墳の動向についてみたいが、通常、首長墳系列とは系譜関係の連続すると想定される大型古墳間の関係を指すのであり、実際の地域単位にもとづく地域間関係とは異なるとみななければならない。後者の関係は群集墳の分布様相において、反映されるものと考えられる。したがって、群集墳と大型古墳の分布様相を対比させることによって、各地域の政治的動向が理解できるものと考えられる。

京都平野は周防灘に面して形成される平野で、当時の海岸線は現在よりも南西に入っていたと考えられる。平野を取り囲む山地の尾根上には多くの群集墳・横穴墓群が築かれており、大型古墳を中心に小地域を単位としてまとまるようにみえる(図一)。各小地域の大型古墳の消長をみると(表一)、苅田地区においては、すでに集成編年<sup>(15)</sup>一期には石塚山古墳(一一〇m:以下、とくに断らなければ前方後円墳)が築かれるが、その後は続かない。六・七期(五世紀中葉後半)になって築かれる御所山古墳(一一八m)は、初期横穴式石室を埋葬主体にもち、変形四獣鏡・玉類・馬具などが出土している。八期(五世紀末・六世紀初頭)には番塚古墳(五〇m)が築かれており、副葬品として、画像鏡・大刀三・鉄矛・挂甲・馬具・玉類などが出土している。<sup>(16)</sup>その後、この地域では

古墳時代後期の地域編成

周防灘



図1 京都平野周辺における古墳の分布

一一一

大型古墳が続かない。

白石地区では、七期以前には大型古墳はみられないが、八・九期に神護古墳、九・一〇期には先後関係は不明であるが、黒添メウト塚古墳(四〇m)と徳永丸山古墳(四〇m)が築かれている。苅田地区の首長墳系列からつながる可能性がある。

長狭川中流域では、八期に八雷古墳(七四m)、九期に複室構造の横穴式石室をもつ庄屋塚古墳(九〇m)が築かれる。その後、一〇期(六世紀末頃)には橘塚古墳(方墳・四〇m)、七世紀初頭には綾塚古墳

表 1 京都地域の主要な大型古墳と群集墳の消長

No.	遺 跡 名	7 期	8 期	9 期	10 期	7c 前半
6	〈苅田地区〉 新津原山古墳群	●(1)	●(2)			
6	新津古墳群					
	松山古墳群					
	富久古墳群					
20	〈白石地区〉 山口南古墳群			●(4)	●(5)	●(6)
43	福丸古墳群					
75	〈長峽川中流域〉 勝山古墳群		●(8)	●(10)	●(11)	●(12)
69	前田山遺跡 (横穴)					
70	下稗田遺跡 (横穴)					
86	〈長峽川上流域〉 亀田道古墳群		●(13)	●(14)		
93	下田南古墳群					
	〈祓川下流域〉 渡筑紫古墳群	●(15)			●(16)	
	稲童古墳群					
166	〈祓川中流域〉 竹並遺跡 (横穴)			●(18)	●(17)	●(19) ●(20)
167	八景山山麓古墳群					
	八景山南古墳群					
	鋤先古墳群					
	徳永川ノ上古墳群					
187	北垣古墳群					
	大塚古墳群					
	古門山古墳群					
	〈今川中流域〉			●(22)	●(23)	●(24)

(円墳・三〜四〇m) が築かれる。両古墳とも巨大な花崗岩を用いた、長大な複室構造の横穴式石室を埋葬主体としており、綾塚古墳の玄室内には家形石棺を納めている<sup>(18)</sup>。また、長峽川上流域では、八期に扇八幡古墳(五九m)、九期に箕田丸山古墳(四〇m)が築かれる。長峽川流域では、前方後円墳の規模でみるかぎりおおよそ八期を境として、苅田地区から長峽川中流域へと中心が移る。この現象から、中期と後期の間で盟主的地位が移動したとみる見解がある<sup>(19)</sup>。

祓川下流域の稲童地区では、七期に帆立貝式の前方後円墳である石並古墳(六八m)が築かれるが、続かず、九一〇期になって隼人塚古墳(四二m)が営まれる。祓川中流域の豊津丘陵では、一〇期に長大な複室構造の横



穴式石室をもつ甲塚方墳（四七×三六m）、一〇期の終わりく七世紀前半に彦徳甲塚古墳（円墳・二九m）など大型の円・方墳が築かれるが、九・一〇期にはヒメコ塚古墳（四二m）、惣社古墳（三〇m）が築かれる。ここでも先と同様、祓川下流域から中流域へと大型古墳の中心が移る。今川中流域でも時期は八く一〇期と考えられる本庄古墳（二八m）・大熊古墳（三〇m）・上大村古墳（三三m）がまとまって築かれている。

このように、京都平野では長峡川流域と祓川流域、いずれも各小地域単位で大型古墳が存在するとともに、盟主的古墳があり、八期（五世紀後半頃）からその地位が移動することが指摘できる。そして、これら大型古墳を中心として、その周辺の丘陵上に群集墳・横穴墓群が築造されるが、いわゆる「新式群集墳」の築造開始時期は一〇期（六世紀後半く末）にほぼ集中する。

また、群集墳・横穴墓は集落があると想定される平野部の周囲の丘陵上に位置することから、地域単位を反映すると考えられる。京都平野は、律令期の地域区分では、長峡川を郡境として、北側を旧京都郡、南側を旧仲津郡に分けられると<sup>(20)</sup>考えられる。旧京都郡域では、大型古墳および群集墳・横穴墓群の分布状況から、四つのグループがみられる。同様に、旧仲津郡域では、五つのグループが認められる。両郡内の郷名について平安期の『和名類聚抄』の記載をみると、<sup>(21)</sup>旧京都郡では諫山・本山（田）・刈田・高來の四郷があり、群集墳・横穴墓のグループ数と対応する。すなわち、諫山郷は長峡川上流域の古墳グループ、本山郷は長峡川中流域のグループ、刈田郷は<sup>(22)</sup>苅田地区のグループ、高來郷は白石地区のグループと対応しそうである。旧仲津郡では、<sup>(22)</sup>皆見・葛野・城井・狭度・高屋・中臣・仲津・高家？の八郷があり、群集墳・横穴墓のグループ数と対応しないが、旧仲津郡の範囲はさらに今川、祓川上流域以南まで広がるとみられるので、グループ数が増加する可能性もある。また、皆見郷は祓川下流域の古墳グループ、高屋郷は今川中流域のグループ、おそらく仲津郷も祓川中流域のグループと対応するようであり、その他の郷についても現地名からの比定は難しいが、いずれかの古墳グループに対応すると考え

られる。

このように、群集墳・横穴墓の分布が地域単位に対応し、各グループの中心的古墳がこれらに先行する八期に築造を開始する。これは、八期以前の大型古墳が旧京都郡、旧仲津郡の各郡に一基程度みられることから、この地域単位の統合のシンボリックな意味合いをもつ可能性が高い。しかし、八期以降、大型古墳が律令期の郷に相当する程度の小地域単位で存在することから、前方後円形という墳丘形態にシンボリックの意味合いを残すものの、盟主的地位の移動というばかりではなく、より下位の小地域の有力者層にも造墓が可能になったといえる。それと同時に、より広い階層の造墓という流れは、群集墳の造墓階層にまで及んだと考えられる。

また、長峡川中流域のグループでは、前方後円墳の築造が終了する六世紀末以降、橘塚古墳・綾塚古墳といった巨石使用の横穴式石室を埋葬主体とする大型方・円墳が築かれる。とくに綾塚古墳の石室内には家形石棺を安置することから、大和王権とのかかわりの深い在地豪族層、もしくは官人層が被葬者として推定され、従来の造墓原理とは異なる。同様に、祓川中流域の甲塚方墳と彦徳甲塚古墳も在地の脈絡とは異なるといえよう。また、これら古墳の出現地域が、従前の中心的地域に築かれると同時に、前方後円墳の消滅時期に一致することから、より実際の階層関係が反映されている可能性が高い。具体的には、国造層等、後の郡司層に相当するような有力者が想定できる。とくに、祓川中流域では後に豊前国府が設置される等、旧豊前国における中心でもあったと考えられる。

一方、すでに古墳時代開始当初に群集墳の形成がみられるが、新式群集墳とは異なる。竹並遺跡では、古式横穴墓（五世紀後半～末）、墳丘をもつ横穴墓（六世紀前半）、横穴墓の増加（六世紀後半～七世紀初頭）という変化がみられる。<sup>(23)</sup>このような変化をより広い階層への造墓が拡大するプロセスと捉えれば、大型古墳の動向と連動するといえるだろう。

## (二) 宗像地域

宗像地域は旧宗像郡の範囲について検討を試みることにする。この地域は、大きく津屋崎地区・新原奴山地区・須多田地区、そして、釣川中流域に分けられる。とくに、津屋崎・新原奴山・須多田地区と釣川中流域との間で、大型古墳の分布様相が大きく異なる点が特徴といえる(図2)。海岸部に位置する津屋崎地区・新原奴山地区・須多田地区では、前方後円墳を中心とする大型古墳が古墳群を形成するが、各古墳群は、それぞれ時期的に連続し、系列をなすのに対して、釣川中流域では群集墳中に一、二基築かれる程度である(表2)。

津屋崎地区では六・七期の津屋崎四一号墳(九〇m)、七期の津屋崎一〇号墳(七〇m)、八期の上野三号墳(四〇m)が築かれる。新原奴山地区では、七期の新原奴山一号墳(五〇m)を皮切りに、新原奴山二三号墳(七〇m)、一二四号墳(五四m)、一二号墳(五七m)、三〇号墳(五四m)と連続的に一〇期まで築かれている。両地域で先行するのは、五期に津屋崎三三三号墳(五五m)、六期の奴山三三三号墳(円墳・三三三m)がみられ、それ以前には営まれない。

須多田地区では八期の在自剣塚古墳(八五m)が築かれた後、九・一〇期に上ノ口古墳(四三m)・天降神社古墳(八〇m)・下ノ口古墳(八二m)・ミソ塚古墳(八二m)が先後関係は不明だが連続的に築かれている。一方で、宮司ノ手光において、五期に大刀・剣・短甲など豊富な鉄器を副葬する井手ノ上古墳<sup>(24)</sup>(円墳・二六m)が築かれる。その後、七世紀代になって、手光波切不動古墳・宮地嶽古墳といった巨石使用の横穴式石室を埋葬主体とする終末期の円墳が築かれる。

このように、津屋崎地区・新原奴山地区・須多田地区では五世紀前半・中葉以降、大型前方後円墳が群を形成しはじめるとともに、ほぼ同時並存する様相も認められる。これらの古墳を築きうる有力者層の生産基盤の大き



図2 宗像地域における古墳の分布

表 2 宗像地域の主要な大型古墳と群集墳の消長

No.	遺 跡 名	7 期	8 期	9 期	10 期	7c 前半
	〔津屋崎〕	●(2)	●(1)			
2	〔新原奴山〕	●(3)	●(6)	●(4) ●(5)	●(7)	
4	勝浦水押古墳群					
	新原奴山古墳群					
	〔須多田〕		●(15)	●(11) ●(12)	●(13) ●(14)	
17	須多田立石古墳群					
	清田ヶ浦古墳群					
	在自鬼塚裏古墳群					
58	久戸古墳群 (北群)					
59	久戸古墳群 (南群・横穴)					
54	相原古墳群				●(17)	
67	稲元古墳群					
70	須恵須賀浦遺跡 (横穴)			●	(18)	
80	半田古墳群			●		
77	平等寺向原古墳群			●	(21)	
75	平等寺原古墳群			●	(22)	
78	城ヶ谷古墳群			●	(19)	
79	三郎丸堂の上古墳群					
108	大井三倉古墳群					
108	大井三倉遺跡群 (横穴)					
107	村山田高江古墳群					
101	大穂町町口古墳群					
94	浦谷古墳群					
95	朝町山ノ口古墳群					
97	朝町妙見遺跡 (横穴)					
104	王丸長谷古墳群					
105	王丸清瀬古墳群					
92	名残高田古墳群				●(23)	
92	名残長浦古墳群					
92	名残藤河内古墳群					
91	富地原上瀬ヶ浦古墳群					
91	富地原梅木古墳群					
91	富地原大原古墳群					
90	武丸町添古墳群					
89	武丸皆真庵古墳群					
29	手光古墳群					
	津丸横尾古墳群					
	津丸古墳群					
	八並中原古墳群					

さが推測されるが、古墳群の東側は山地であり、西側には当時は勝浦潟と呼ばれる入海があったと考えられることから、可耕地として利用できる土地はほとんどなかったとみられる。

一方釣川中流域では、二期に田久瓜ヶ坂一号墳（約30m）、三期に東郷高塚古墳（62m）が築かれて後は、大型古墳は築かれないが、九期のスベツトウ古墳（38m）・久原三号墳（45m）、一〇期の相原二号墳（62m）といった前方後円墳が築かれている。さらに、神湊地区では石室内に装飾をもつ桜京二号墳（41m）が築かれている。とくに、一〇期の相原二号墳を津屋崎・新原奴山・須多田地区からの系列とみる見解がある。<sup>(25)</sup>しかし、同時期に、新原奴山・須多田地区で大型古墳が営まれること、これらの前方後円墳は群集墳中に築かれることから、それ以前の前方後円墳とは築造原理が異なる。また、宗像地域全体をみると、釣川中流域に須恵器窯跡や製鉄遺跡が集中しており、これらの生産基盤をもつ有力者層による前方後円墳が九期になって造墓が可能になり、さらに下位層にまで造墓が拡大したと考えられる。

宗像地域の群集墳は八期には古式の形態をとって築造されはじめ、一〇期にピークとなる。しかし、埋葬施設は時期によって異なっており、たとえば、久戸古墳群<sup>(26)</sup>では六世紀中葉以前には、竪穴系横口式石室か横穴墓で墳丘をもつものであったが、七世紀前半には横穴式石室や横穴墓群を一時期に集中的に築造するようになる。

旧宗像郡においては、秋・山田・怡土・荒自・野坂・荒木・海部・席内・深田・荻生・卒家・小荒・大荒・津丸の一四郷から成っている。<sup>(27)</sup>そのうち、荒自郷が須多田地区のグループ、大荒・小荒郷が勝浦・津屋崎のいずれかのグループに対応する可能性がある。<sup>(28)</sup>

また、釣川中流域に比定できそうな郷として、山田・野坂・荒木の各郷があり、秋・怡土の二郷も比定される可能性はあるが、京都・仲津郡のように、郷単位で大型古墳が築かれる様相はみられない。

## (三) 博多湾沿岸

この地域については、すでに群集墳の分布様相にかんする研究もおこなわれており、それを参考にみる。土井基司氏は博多湾周辺地域、すなわち福岡平野および早良平野周辺の群集墳の様相について検討している。<sup>(29)</sup>その結果、この地域では六世紀初頭より後期群集墳の形態をなす古墳群の形成がはじまるが、墓域は古墳群の中の一部に限定され、六世紀末に近づくとも小単位の数が急激に増えることを指摘した。これについては、六世紀中頃後半に大規模な土地開発のピークがあり、生産力の急激な拡大があった結果、人口の増加と「分家」が進行したことに対応した現象と捉え、六世紀末をもって群集墳の開始時期と位置づけた。

これに対して、大型古墳の動向をみると、春日周辺において、八〇期に貝徳寺古墳(四七m)・日拝塚古墳(四六m)・下白水大塚古墳(四一m)など中規模の前方後円墳が築かれ、那珂川下流域でも東光寺剣塚古墳(七五m)が築かれる。しかし、群集墳の数に比較して、その数は非常に少なく、京都平野のように律令期の郡・郷に相当する単位で大型古墳が存在するというわけではない。ただし、御笠川右岸中流域において、複室構造の横穴式石室を埋葬主体にもつ大型円墳である今里不動古墳が六世紀後半から七世紀前半に築かれる。このことから、せいぜい律令期の郡の範囲を単位として有力者が存在し、その下位層は大型古墳を築いていないとみられる。

## 三、古墳時代後期の地域編成

以上の検討をとおして、京都平野では、五世紀後半以降、大型古墳が築造されはじめ、六世紀代をとおして継続的に築かれる。また、これらの古墳が築造される小地域は群集墳との関係からみて、地域単位を形成しており、大型古墳はその中心的位置を占める。この地域単位は律令期の郷の範囲に当たる程度の規模である。これに対し

て、宗像地域では、小地域単位の中心的位置に前方後円墳が築かれるのは六世紀前半以降であるが、鈞川中流域では郷に相当する範囲を単位として必ずしも営まれず、一方で、津屋崎周辺では大型古墳が数群に分かれて古墳群を形成する。この差は、各地域の有力者層が郡規模の範囲においてもつ力関係が、階層的秩序の形成に反映された可能性があろう。すなわち、宗像地域において津屋崎地区に大型古墳群を形成する有力者層は、京都平野の盟主的な有力者層に比べて地域内における地位が相対的に高いといえる。また、重藤輝行氏は京都平野のある豊前北部では六期に前方後円墳を中断する画期がみられ、九期以降安定した系列になるとする<sup>(30)</sup>。この点は、田中良之氏が五世紀後半に父系イデオロギー・家父長制イデオロギーが導入されるとともに、首長墳系列がそれを境に安定し連続することと関連させている<sup>(31)</sup>。それに比べて宗像地域では、すでに七く八期には安定した系列を示向する。

一方で、この地域単位を形成する群集墳・横穴墓は、六世紀後半に至ると急激に増大する。また、京都平野・宗像地域では横穴墓が盛んに築造されるが、すでに五世紀後半には竹並遺跡において築かれており、とくに六世紀後半における増加が著しい。これは「傍系親族の分節運動」とみられるが<sup>(32)</sup>、さらに幅広い階層へと造墓運動がおこなわれたことを示している。

また、京都平野では八期以降、律令期の郷の範囲に相当する規模を単位として、宗像地域では九期になって群集墳中に前方後円墳が築かれる。このように、より下位の有力者層にまで前方後円墳の築造がおこなわれていく過程が六世紀代をとおしてみられる。大型古墳との関係からみると、群集墳が大型古墳の周辺に形成されはじめるのは、これらの大型古墳を中心とする地域集団の構成原理を求めたためであったとみられる。ただし、この場合、大型古墳の被葬者と群集墳・横穴墓の被葬者集団との間に擬制的な血縁原理が存在したとは考えにくい。大型古墳が地域統合のシンボリック的存在であった可能性もあるが、むしろより実際的な支配関係が表現されていた可



能性が高い。これは、宗像地域において、小規模な前方後円墳が群集墳を形成する単位において中心的存在であった点からも指摘できる。

さらに、六世紀末から七世紀前半にあって、前方後円墳の築造が列島規模でも停止に向かう。その動きに反して、京都平野における橘塚古墳・綾塚古墳・甲塚方墳、宗像地域の宮地嶽古墳や手光波切不動古墳のような巨石を使用した横穴式石室を有する円墳・方墳が律令期の郡規模の範囲の中心に築造されている。これらの古墳は、シンボリックな意味合いは薄れ、実際の支配関係が顕現されたとみられる。宮地嶽古墳の被葬者に宗像君徳善が推定されることや、綾塚古墳に家型石棺を埋置することから考えて、その被葬者は大和王権とのつながりの深い在地有力者層もしくは、畿内の豪族層であったと想定されよう。また、甲塚方墳や彦徳甲塚古墳は、後に豊前国府が築かれる中心に築かれることからこれらの古墳が六世紀末以降、律令期につながる地域的中心に存在したと考えられよう。

### おわりに

拙稿では、京都平野と宗像地域を中心に、大型古墳・群集墳の分布様相から地域単位を抽出するとともに、大型古墳と群集墳の消長およびそれらの階層的関係について検討をおこない、後期古墳に表現された地域編成のあり方について述べた。

しかし、時期設定など不十分な点が多々あり、十分に議論を整理できず論理の飛躍もあったと思われる。また、今回、十分な検討をおこなっていない福岡平野周辺を含め、今後、より詳細な検討が必要である。

本稿を成すにあたり、日頃より御指導を頂いている田中良之先生、岩永省三先生をはじめ、日常的に激励して下さる宮本一夫先生に感謝申し上げます。また、溝口孝司先生、辻田淳一郎先生、中橋孝博先生、佐藤康也先生

をはじめ、西健一郎氏、石川健氏にもお世話になっている。末筆ながら記して感謝の意を表したい。

## 注

- (1) 拙稿 二〇〇三「北部九州における須恵器生産の動向」『古文化談叢』第四十九集
- (2) 近藤義郎 一九五二『佐良山古墳群の研究』津山市教育委員会
- (3) 西嶋定生 一九六一「古墳と大和政権」『岡山史学』十
- (4) 白石太一郎 一九六六「畿内の後期大型群集墳に関する一試考―河内高安千塚及び平尾山千塚を中心として―」『古代学研究』第四十二・四十三合併号
- (5) 広瀬和雄 一九七八「群集墳論序説」『古代研究』十五
- (6) 田中良之 一九九五『古墳時代親族構造の研究』柏書房
- (7) 群集墳出現の理解に関する研究のまとめは、次の文献に詳しい。  
岩永省三 二〇〇三「古墳時代親族構造論と古代国家形成過程」『九州大学総合研究博物館研究報告』第一号
- (8) 都出比呂志 一九七〇「横穴式石室と群集墳の発生」『古代の日本』第五卷 近畿 角川書店
- (9) 水野正好 一九七〇「群集墳と古墳の終焉」『古代の日本』第五卷 近畿 角川書店
- (10) 辰巳和弘 一九八三「密集型群集墳の特質とその背景―後期古墳論(二)―」『古代学研究』一〇〇
- (11) 和田晴吾 一九九二「群集墳と終末期古墳」『新版古代の日本』第五卷 近畿Ⅰ 角川書店
- (12) 白石太一郎 一九七三「大型古墳と群集墳―群集墳の形成と同族系譜の成立―」『檀原考古学研究所紀要考古学論攷』第二冊
- (13) 河村好光 一九八〇「後期古墳の編成秩序とその展開」『考古学研究』第二十七卷第一号
- (14) 和田晴吾 一九九八「古墳時代は国家段階か」『古代史の論点』四 権力と国家と戦争 小学館
- (15) 近藤義郎編 一九九二『前方後円墳集成―九州編―』山川出版社のほか、重藤輝行 一九九八「古墳時代中期における北部九州の首長と社会―福岡県を中心として―」『中期古墳の展開と変革―五世紀における政治的・社会的変化の具体相(二)―』及び報告書等を参照した。
- (16) 九州大学考古学研究室・苅田町教育委員会 一九九三『番塚古墳』

- (17) 小田富士雄 一九六八「横穴式石室古墳における複室構造の形成」『史淵』第百輯
- (18) 梅原末治 一九三七「日本古墳巨大石室聚成」『大和島庄石舞台の巨石古墳』京都帝国大学文学部考古学研究報告第十四冊
- (19) 重藤輝行 一九九八「古墳時代中期における北部九州の首長と社会―福岡県を中心として―」『中期古墳の展開と変革―五世紀における政治的・社会的変化の具体相(一)―』第四十四回埋蔵文化財研究集会発表要旨集
- (20) 宮本一夫・岡田裕之・田平陽子・出口敦・有馬隆文 二〇〇二「糸島地域における遺跡分布の地理情報システム(GIS)による研究」『九州考古学』第七十七号
- (21) 池邊彌 一九九六『和名類聚抄郷名考証』吉川弘文館
- (22) 『角川日本地名大辞典』四〇、福岡県、角川書店
- (23) 竹並遺跡調査会 一九七七『竹並遺跡―福岡県行橋市竹並所在遺跡の調査―』
- (24) 津屋崎町教育委員会 一九九一『宮司井手ノ上古墳』津屋崎町文化財報告書第七集
- (25) 花田勝広 一九九一「筑紫宗像氏と首長権」『地域相研究』第二十号
- (26) 宗像町教育委員会 一九七九・八〇『久戸古墳群』・『久戸古墳群II』宗像町文化財調査報告書第二・三集
- (27) 前掲注(21)
- (28) 前掲注(22)
- (29) 土井基司 一九九二「横穴式石室から見た群集墳の様相―博多湾周辺地域を中心に―」『九州考古学』第六十七号
- (30) 前掲注(19)
- (31) 前掲注(6)
- (32) 前掲注(6)

図版キャプション

〔図一・表一〕

(1)御所山古墳、(2)番塚古墳、(3)恩塚古墳、(4)神護古墳、(5)黒添夫婦塚古墳、(6)徳永丸山古墳、(7)ビワノクマ古墳、(8)八雷古墳、(9)寺田川古墳、(10)庄屋塚古墳、(11)橘塚古墳、(12)綾塚古墳、(13)扇八幡古墳、(14)箕田丸山古墳、(15)石並古墳、(16)隼人塚古墳、(17)ヒメコ塚古墳、(18)惣社古墳、(19)甲塚方墳、(20)彦徳甲塚古墳、(21)姫神古墳、(22)本庄古墳、(23)大熊古墳、(24)上大村古墳、(25)節丸古墳、1 八郎塚古墳、2 正福寺古墳、3 莊原池古墳、4 尾倉古墳、5 古大内古墳、6 新津古墳群、7 百合ヶ丘古墳群、8 猪熊古墳群、9 狛師ヶ谷古墳群、10 二崎古

墳群、11葛川京越古墳群、12葛川宮ノ下古墳群、13原の下古墳群、14正覺寺古墳群、15松蔭東古墳群、16松蔭北古墳群、17山口古墳群、18山口田村宅裏古墳群、19山口上古墳、20山口南古墳群、21神護北古墳群、22神護古墳群、23山入古墳群、24スゲ原古墳群、25谷南古墳群、26角藏古墳群、27宮ノ脇古墳群、28堂ノ上古墳群、29コウリョウ古墳群、30法正寺社古墳群、31段々古墳、32法正寺西古墳群、33奥の谷古墳群、34ミトノ首古墳群、35法正寺山入古墳群、36西生院古墳群、37黒添トキワ古墳群、38シシ穴古墳、39黒添古墳群、40金福寺古墳、41願光寺裏山古墳、42引石古墳、43福丸古墳群、44十塔ヶ峯古墳、45安樂寺西南古墳群、46別所原古墳群、47下原横穴墓群、48長尾楠木横穴墓群、49ビワノクマ横穴、50小首古墳、51吉本古墳、52大首池北古墳群、53天サヤ池西古墳群、54北ヶ迫池北古墳群、55御清水池北古墳群、56御清水池南古墳群、57御清水池南古墳群、58タモト水古墳群、59バンリユー古墳、60三ツ塚古墳群、61五位ノ木池西古墳群、62見立古墳群、63小松池西古墳、64新池西南古墳群、65永敬寺裏古墳群、66浄古庵古墳群、67力石武ノ本横穴墓群、68小口迫池上横穴墓群、69前田山横穴墓群、70下稗田横穴墓群、71呼塚古墳群、72二又池南古墳群、73小堤池北古墳群、74小堤池南古墳群、75勝山古墳群、76勝山池西古墳群、77一の塚古墳、78龜田池南古墳群、79池田池東古墳群、80旧小学校地古墳、81若宮八幡横穴墓群、82宮ヶ谷池南古墳群、83宮原古墳群、84中原古墳群・横穴、85キベカ迫古墳群・横穴、86龜田道古墳群、87大池南古墳群、88三島山古墳群、89御手水道古墳、90大古野西古墳群、91大古野西古墳群、92下田神社古墳、93下田南古墳群、94大原八幡古墳、95上久保古墳群、96図師棚田古墳群、97平尾西古墳、98雁俣池西古墳群、99図師東古墳群、100図師西古墳群、101石ヶ坪池古墳群・横穴墓群、102妙見古墳群、103津積御峰古墳群、104魂塚堀殿古墳群、105高来池南古墳群他、106経塚古墳群、107堂ヶ迫古墳群、108鋤迫サヤヶ谷古墳群、109茶臼山古墳群、110ゴウヤ古墳群、111往還池古墳群、112鹿ヶ谷横穴墓群、113迫古墳群、114大將陣横穴墓群、115古城尾古墳群、116高崎古墳群、117古川迫古墳群、118平原古墳群他、119小松原古墳群他、120オクガ迫古墳群、121富塚古墳群、122福六古墳、123鳥池西古墳群、124神手ヶ池古墳群他、125ソウエンダ古墳群、126コンヤ塚原古墳群、127城山古墳群、128山鹿神社南古墳群他、129ナノミ古墳群、130大熊北古墳群、131大熊南古墳、132本庄池北古墳群、133長迫古墳、134古川大塚古墳、135クシガ迫古墳、136養島古墳、137兵庫山古墳、138宮ノ下古墳群、139長井陣山古墳群、140西梅崎古墳群、141生目神社境内古墳、142報恩寺裏山古墳群、143カンランヤマ古墳群、144山田池古墳群、145山ノ神池東古墳群、146小迫谷古墳群、147馬場代古墳、148穴田古墳群、149高瀬古墳、150宮山横穴墓群、151欠塚古墳群、152硯山古墳群、153赤迫古墳群、154上迫横穴墓群、155豊後塚古墳群、156大山古墳、157高畑古墳群、158尾曲古墳、159寺屋敷横穴、160鬼塚古墳、161上人塚古墳、162徳永イナリ古墳、163京塚古墳群、164三ツ塚古墳群、165通り迫古墳群・横穴墓群、166竹並遺跡群、167八景山山麓古墳群、168矢留二升五合古墳、169鬼塚古墳、170甲塚古墳群、171奥山古墳、172大將山古墳、173尾花原横穴、174新村ノ上南古墳、175屋敷田山古墳群、176豊栄古墳群、177火箱古墳群、178堂がへり古墳群、179朝日寺古墳群、180辛山古墳群、181王子ヶ迫古墳群、182横井塚古墳群、183安永古墳群、184後谷古墳、185ヶ原古墳、186ヶ原下古墳群、187大塚古墳群、188古墓山古墳、189永迫古墳、190節丸西古墳群、191椎ノ木古墳群、192ゴウヤベラ古墳群、193上明神古墳群、194焼毛蛸古墳

## 〔図二〕

(1)勝浦峯ノ畑古墳、(2)勝浦井ノ畑古墳、(3)新原奴山1号墳、(4)新原奴山24号墳、(5)新原奴山12号墳、(6)新原奴山22号墳、(7)新原奴山30号墳、(8)生家大塚古墳、(9)大石岡ノ谷1号墳、(10)大石岡ノ谷2号墳、(11)須多田上ノ口古墳、(12)須多田天降天神社古墳、(13)須多田下ノ口

古墳、(14)須多田ミソ塚古墳、(15)在自剣塚古墳、(16)牟多田4号墳、(17)相原E-1号墳、(18)須恵クヒノ浦1号墳、(19)城ヶ谷3号墳、(20)東郷高塚古墳、(21)スベットウ古墳、(22)久原澤田3号墳、(23)徳重高田16号墳、(24)名残高田25号墳、(25)田久瓜ヶ坂I区SO-01古墳、1勝浦乗越古墳、2勝浦水押古墳群、3奴山正園古墳、4新原奴山古墳群、5須多田宮ノ下古墳、6須多田ニタ塚古墳、7塩浜古墳、8梅津古墳、9森山古墳群、10丸山古墳、11水上古墳群、12彦六古墳、13入津加古墳群、14大在自古墳群、15大力谷古墳群、16大力様古墳群、17清田ヶ浦古墳群、18宮地嶽古墳、19宮司井手ノ上古墳、20天神古墳、21大志登古墳、22経塚古墳、23鳥の巢古墳、24頭脳山観音古墳、25高貫古墳、26鞍掛古墳、27城古墳、28手光波切不動古墳、29手光古墳群、30冠古墳、31小竹古墳、32野間尻古墳群、33長尾古墳群他、34飛塚古墳群、35桑ノ木古墳、36大塚古墳、37元神輿古墳、38鳥ノ巢古墳、39椿古墳、40猿田古墳、41畦町古墳、54相原古墳群、58・59久戸古墳群、67稲元古墳群、70須恵須賀浦遺跡、75平等寺原古墳群、77平等寺向原古墳群、78城ヶ谷古墳群、79三郎丸堂の上古墳群、80平等寺半田古墳群、82三郎丸古墳群、89武丸皆真庵古墳群、98武丸町添古墳群、91富士原梅木古墳群、92名残遺跡群、93百田古墳群、94朝町浦谷古墳群、95朝町山ノ口古墳群、96野坂新田古墳群、97朝町妙見古墳群、98中松元古墳群、99光岡草場古墳群、100大穂町原古墳群、101大穂町町口古墳群、102王丸出口古墳群、103久原古墳群、104王丸長谷古墳群、105王丸清瀬古墳群、106東郷古墳群、107村山田高江古墳群、108大井三倉遺跡、109大井池ノ谷遺跡、王丸長谷古墳群